

## 平和研究の未来責任

昨日 17 日、「戦争法案」が参院特別委員会で強行採決された。国民の多数が反対している中での強行採決は、断じて許せない。採決の映像を見て怒りがわいた。

国際政治学者の坂本義和先生なら、この深刻な日本の「事態」をどうコメントされるであろうか。雑誌『世界』などで、先生の論文を数多く読んできたので、日本の将来を方向づけるような日に、先生の本を紹介することにした。

国際政治学・平和研究で著名な坂本義和先生は、昨年 10 月に亡くなられた。写真は朝日新聞 2014 年 10 月 7 日による。今年 6 月、表題をタイトルにした本が出版された。凡例には次のように書かれている。本書は『坂本義和集』全 6 巻、岩波書店、2004-05 年に収録されなかった著作のなかから 45 編の論文・エッセイ・時評・書評を選択し収録した。巻頭と巻末の論文のそれぞれ最初と最後を紹介したい。



巻頭の「平和研究の未来責任」から

—「平和」とは、おそろしい言葉である。イエス・キリストも、預言者ムハンマドも、釈迦牟尼も、切実に「平和」の重要さを訴えた。それは、すでにその頃までに、またその時代に、いかにおびただしい戦争による流血があり、飢餓や病による死者があり、相手をヒトと思わない残忍な宗教や習俗があったかを物語っている。「平和」という言葉の背後には、巨大な墓場と限りない悲惨があり、それは現代も変わっていない。だから「平和」とは、この非人間的で残酷な歴史と現実に対するたたかいなのであり、平和研究も、苦難の歴史と未来に対する、知のたたかいなのだ。

アジア太平洋戦争では、アジアの数千万の人間が殺害され、2 百万を超える日本軍兵士死者のほぼ半数は餓死で斃れ、本土の住民も、子どもに至るまで猛爆の犠牲となり、飢餓の脅威にさいなまれた。そして戦争が終わった時、「生き残った者は、何をすればいいのか」と、多くの人が自問したのだった。「生き残った人間は、どうすれば自分の生存を意味あるものにする社会をつくれるのか」という切実な課題との格闘だった。

これが戦後日本の市民の原点だったし、またそれは現在地球上に「生き残っている」私たち自身への問いかけに他ならないと私は考える。

\* 『PRIME』明治学院大学国際平和研究所第 30 号、2009 年。この課題提示は、巻末の論文に発展する。

巻末の『いのち』を生かす、たたかひの研究」から  
—「たとえ明日、世界が滅ぶとしても、私は、今日リンゴの種を播く」という言葉がある。たとえ明日、日本が、あるいは世界が壊滅するかもしれないとしても、「いのち」の尊厳のためにたたかひを続けるのが平和研究でなければならない。

「平和」とは、決して平穏な状態を意味するのではなく、「いのち」を生かすための、絶えざるたたかひのプロセスに他ならないのだ。

\* 『世界』2014年3月号。2013年11月10日、日本平和学会と明治学院大学国際平和研究所が共催した講演をもとに加筆・修正を加えたもの。講演の翌日、著者は入院した。その後退院し自宅で療養しつつリハビリに励んだが、翌年10月2日に死去した。この論文が絶筆である。

(2015年9月18日)